

「滑落」で本当に書きたかったこと

田 沢 馨

「滑落」という文章を初列風切(No.156)に書いた。事実としては確かに書いた通りだが、脳裡に浮かび思い出したことはもっと別のことだった。それを書きたかったのだが、紙数及び内容が会報に不適だと思い、やむなくああいう形になったが、滑落直後の強烈な印象が忘れがたく、書くだけは書いておこうと思った。

過去三度、死にそうになった場面があった。何れも若い頃だが…。

函館、夜明け前。船乗りだった私は船から逃げ出し、七重浜を市街へ急いでいた。風が強い日だった。草原がうねるように激しく揺れ動いていた。前途は暗かった。不安と絶望が交錯していた。とりあえず東京へ…と、呟いて風に追い立てられるように私の放浪の第一歩が始まった。

意図的に奥羽線で東京に向った。北常盤から川部間を車窓から必死で我が家の方向を見つめていた。三ヶ月前、Iを中心に柔道部の連中から結婚の前祝いをして貰っていた。両親も承諾済みだった。彼女の心変わりが始まったのはそれから間もない頃だった。私は北海道航路の船員をしていた。仕事の性格上、彼女と会ってどうのこうのという訳にはいかなかった。やり取りは全

て手紙だった。何度も翻意を促したが無駄骨だった。前祝いをして貰った手前、どの顔^{つら}下げて友人たちに会えようか？ まして両親には…。全てを捨てるという選択肢しかなかった。車窓から我が家は見えない。が、生まれ育った村は見えた。二度と帰らないであろう故郷の田園風景を目に焼けつげようと必死だった。出穂の始まった水田の先に岩木山が立ち、万感迫る思いだった。泣きはしなかった。泣くまいと思った。凝視していた岩木山が次第に滲んで見えるようになった。上を見上げて目をつぶると一筋涙の跡ができていた。

上野で待ち合わせていた。何を言うべきか懸命に考えた。希望というにはあまりにか細い糸だったが、真情を吐露すればよりは戻せるかもしれないという一縷の望みは捨てていなかった。本音は放浪の旅などしなくなかった。心優しい友人たちや少しょうとうしいが愛情を注いでくれた家族とは絶対関係を絶ちたくはなかった。彼女との仲を修復しさえすれば、全て問題は解決するはずだった。私に瑕疵^{かし}はなかった。非難、詰問も考えた。切り札として、結婚のために寝食忘れて貯めた貯金通帳を見せれば、あるいは… そういう浅薄^{せんぱく}な目論見もあった。百万以上はあった。狂乱物価の前だっ

たから、金額的価値としてかなりのものだった。前もって彼女には自殺を示唆したものや、放浪の旅に出るなどと脅迫じみた手紙を出していた。

15分遅れて恋人は現れた。気の強い女だったが、むき出しの敵意とかたくな拒否の姿勢が顔に露骨に出ていた。私は物分りがいい。諦めが早い。彼女の姿を見て、何を言っても無駄だと即座に悟った。旅に出よう。旅に出るしかない宿命じみたものを感じ、愚痴はこぼすまい、さわやかに別れようと硬く決意した。肩を並べて二人は歩いた。「おまえ、少し痩せたな。」彼女なりに悩んだ形跡は伺えた。「馨さんもね。」沈んだ口調だった。「隆と上手くやってるか。」そんな会話をしながら国立博物館を過ぎて、芝の広場の木陰のあるベンチに座った。「馨さんとは会いたいと思っても会えなかった。隆には会いたくないと思っても会えたの。」遠く離れていたことが原因だと、そしてそれは私のせいだと暗にほめかしていた。遠距離恋愛の結果が悪いという俗説は耳にしていたが、まさか我が身に振りかかるとは... 返す言葉は沢山あったが、「馨さん」と、さん付けで呼ばれることに私の心はすでに折れかけていた。彼女の気持ちの離反はそれ一つで充分過ぎるほど理解できた。二人の間に別々の時が流れていたことを思い知った。苦い現実を唇を噛み締めて甘んじて受け入れるしかなかった。

高校時代彼女の恋人だったという隆とい

う男と一度だけ会ったことがあった。美形の優男風で線が細く、薄い印象しか残っていなかった。そのいきさつに記憶はないが、彼女だけ妙にはしゃいでいて、挨拶程度の会話はしたが、彼と話すことなど何もなかった。私にしなだれてきて、彼女は「この人と結婚することにしたの。」と唐突に言い、投げやりに「そう。」と呟き、彼は無表情を装った。純朴な田舎者の青年である私はただただ気まずかった。一年前のそんな場面を思い出していた。俺は当て馬だったのか？と疑い、そうであればいいように翻弄されていたのかとも思った。

「私、本当は今日、来たくなかったの。でもこれを返さなくちゃと思って。」半年前に贈ったサファイアの指輪の入った小箱を差し出した。「そんなものゴミだ。どこかに捨てなれ。」「高かったんでしょ？」「イミテーションだ。」「私、これだけは受取れない。」「俺が持っていてもしかたがない。」「これがあると私の気持ちに決着がつかないから...」「それはおまえの問題だ。」私は強固に指輪の受取りを拒否した。若いとは時に酷薄なものだ。惨めだった。彼女に悪意というか他意がないだけ、余計に始末が悪かった。私は物分りが良過ぎた。彼女の立場ではそういう物言いは自然だと思った。だが俺にも意地もあればプライドもある、「ふざけるなっ！」と、絶叫したかった。「指輪を渡した時、驚き、喜び、涙を流して感激していたのはおまえじゃないか。」とも言いたかった。しかし、彼女に

対して私は最後までいい人でありたかった。怒りの感情を懸命に押し殺し、そして敗者は何も語らずという美学も持っていた。ただ、断固、指輪の受け取りだけは拒否した。

二人の間を重苦しい沈黙が蔽^{おほ}った。会う前は「もしや」という淡い復縁の期待もあったが、今は彼女と同じ空間にいることが苦痛以外の何ものでもなかった。彼女はもっと苦痛であったろう。深いため息をついては両手で何度か顔を蔽っていた。粗野だがさつ一辺倒の私だったが、相手に気を使わせないように気を使うという、繊細な一面も持っていた。沈黙を打破すべく、宮沢賢治のことを話し始めていた。「俺、最近、賢治に凝ってるんだ。」「知ってる。」と彼女は反応した。当然といえば当然で、彼女に送った手紙に賢治のことを綴ったものが多かった。恋人の不実^{ふじつ}に直面して船の閉鎖的な空間は地獄に等しかった。唯一とはいわないが、賢治の詩や童話は大きな慰めであり、救いだった。利他的で、献身的な賢治の人と為りが理想だった。そんなことを手紙に飽くことなく書いたが、彼女の返信は稀だった。たまに来る手紙には隆とこのことがこれみよがしに書かれていた。そういう時は暗く冷たい海を眺めながら、「雨ニモ負ケズ風ニモ負ケズ・・・ソウユウ者ニワタシハナリタイ」と何度も何度も念仏のように呟^{つぶや}いていた。彼女に憎しみや恨みの感情を抱かなかつたのは全て賢治のお陰だった。

「銀河鉄道の夜」を語った。無口な方だが

文学や哲学など好きな分野のことはいくらでもしゃべれた。相手の思惑は気にせず、自分の言葉に酔い、独りよがり^{ひとりよがり}で熱くなる性質^ただった。ジョバンニは... カンパネルラは... こういう解釈があつて... またこういう別の解釈も成立する... と、我田引水^{わたひきみづ}としか思えないことを熱く語っていた。5分もしゃべったろうか。「もういい。参ったわ。譬^{たと}って何も変わっていない。」実のところ会った時に怒気を含んだ硬い能面のような表情を一瞥して以来、一度も視線を合わせようとしなかった。恐ろしかったというより、会うことを無理強いした引け目もあったが、彼女のきつい眼差しで正対すれば自分の全存在が否定されそうで、正直、やはり恐かった。その時初めて真正面に視線を合わせた。穏やかな表情だった。優しい天使のような微笑をたたえていた。「変わらないのは大事だと思う。でも譬^{たと}のそういうところを見ると、私、少し辛い。人間は変わるものなの。変わらなくちゃいけないの。でも... でも... 私、変わり過ぎちゃった。」表情が曇ったかと思う間もなく、みるみる泣き顔になった。「悪いのは全部私。それなのに譬^{たと}たら... 私を責めればいいのに、詰^なればいいのに。今日は滅茶苦茶非難されるのを覚悟してきたの。なのにこんなんじや、私、参ってしまう。」とめどなく涙を流しながら「本当にごめんなさい。」と凭^{もた}せるように身を崩した。映画ならばしっかりと抱きとめ、キスをしてハッピーエンドになるが、現実はそのようにならない。私は反射

的に^{しりぞき}退き呆気にとられていた。ベンチに伏し肩を震わせていた。声を出し、号泣に近かった。予想もしなかったシチュエーションに私は明らかに戸惑っていた。(泣きたいのはこっちだ。と吐き捨てたい気分だった。しかしこいつもこいつなりに辛い思いもしてきたのだろうと同情もした。振るよりは振られる方が良心の呵責がない分だけ気は楽だ。良心の呵責が... こいつにそれがあったので少しは救われた気がする。いや、女の涙は信用してはいけない) 呆然と立ち尽くしているようでも、私の脳裡では様々な思いが駆け巡っていた。道行く人が胡散臭い目付きで過ぎて行き、非常にバツの悪い思いを味わった。構図的に私は加害者の立場で、そんな馬鹿な、泣きたいのは俺だと主張したかったが、現実、^{おえっ}嗚咽している姿を目の当たりにしてはそれも出来ず、居たたまれない気持ちになった。ここが潮時だと立ち去る決心をした。「無理して来てもらって悪かった。俺は俺の気持ちに^{かた}方を付けたかった。おまえに会えて良かったよ。方を付けた。もう会うことはないから安心しな。じゃ。」ポンと肩を叩いて別れを告げた。「待って。」涙を拭いて上げた厚化粧の顔は、ぐしゃぐしゃに乱れていた。特に目の周りは狸みたいで思わず吹き出しそうになったが、苦笑するにとどめた。「指輪は?」「ああ、それが。なあ、紀子。『北の海に人魚はいない』って知ってるか?」知らないと言った。首を横に振った。「おまえのくれた詩集にある。」「ああ中也ね。『ある

のは浪ばかり』と続くのよね。私、『汚れちまった悲しみ』になっちゃった。」「じゃ俺は、『自^じ恃^じだ!自^じ恃^じだ!自^じ恃^じだ!』と叫ぶしかない。一人で生きてゆくさ。」詩から交際が始まった間柄だから、当意即妙の会話ができた。「それはいい。北の海に人魚がいらないというのは確かだ。だが、俺は北の海が好きでなあ。暗くて冷たい海が大好きだ。」頭の中には霧多布岬や落石岬の風景が浮かんでいたが、そこまで要求するのは酷だと思った。「そこで紀子。おまえが帰省した時でいい、釧路の海に^な捨てられ。それが一番だ。頼んだからな。それと紀子。ちょっと言いにくいんだけど、化粧直して帰った方がいいぞ。」くるっと踵を返して私は上野駅へ急ぎ足で向った。

田沢馨 二十歳 徒手空拳の旅立ちであった。

私はなかなかの文学青年だった。そして何よりも詩人としてありたいと希求していた。それは詩を創ることではなく、生き様として詩人でありたいと希求していた。勿論、詩の創作をしていたが... 才能のないことは、はなから自覚していた・つもりだった。

前橋。『フランスに行きたしと思えど、フランスはあまりに遠し』橋の欄干にもたれて朔太郎の空気を存分に吸っていた。

「風立ちぬ」の堀辰雄的の雰囲気^なを味わいたくて、軽井沢から追分まで歩いた。立原道造の愛してやまなかった風景を満喫したかったが、田舎育ちの私にはこじんまりとし

ていて何一つ感興を覚えなかった。著名人の別荘ばかりで浅間山も俗っぽい山にしか見えなかった。道造の詩を一番愛していたが、追分の風景には涙ぐむほど失望した。

『ひょっとしたら死ぬかもしれない』道造の「初冬」という長い詩の中の一節で何の変哲もない文言だが、妙に私のお気に入り、一日に三度は呟いていた。

『小諸なる古城のほとり、雲白く遊子悲しむ』懐古園に来ていた。下卑た演歌ががなり流れていて興奮めだった。ぼんやり小諸の街並みを眼下に『まだあげ初めし前髪の……花ある君と思ひけり』と藤村の「初恋」を誦んじていた。初恋の人を思い浮かべようとしたが、現れるのは紀子の顔ばかりだった。土足で踏みにじるように突然現れては私の心をかき乱すことが腹立たしかった。一日が無限のように長かった。上野から一週間、それが10年も20年も昔のように感じられた。マニキュアをしている女を反吐するほど嫌っていたが、彼女は赤い爪をしていた。素顔に近いくらい清楚な薄化粧だったのに、けばけばしい厚化粧だった。濡羽色の髪を茶に染めていた。全て私の好む姿とは正反対のものだった。たぶん、私に嫌われようとその日一日だけの演出で、偽悪ぶっていたのだと解釈していた。彼女を忘れたいとは思ったが、忘れようとは思わなかった。結果は悪かったが、彼女との間にはいいことも沢山あった。いい思い出だけを抽出していけば生きてゆけると思った。

どこへ行くというあてはなかった。昨日と違う空の下に居ればよかった。活字中毒だったのに本を読まなくなっていた。持ってきたのが聖書とショウペンハウエルの「自殺論」だけならばそれも無理なかった。長野から直江津へ、日本海に出て西へ西へ海沿いを徒歩や電車で少しずつ進んでいった。

山陰海岸国立公園、香住（兵庫県）の近くに立っていた。断崖絶壁の連なる風景は月並みにいいといえた。だが私は感動していない。久しく感動することを忘れてしまっていた。東尋坊や天橋立など、別に行きたくて行った訳ではないが、いくつかの景勝地を見ても心動かすことはなかった。今なら鬱病と診断できるが、当時の無知な若者にこの無気力がどこに由来するのか（原因の一つは失恋だと思っていた）さっぱり見当がつかなかった。元来感激屋である。落ち込みも激しいが、立ち直りも早いと自負していた。放浪すれば未知の刺激が生活を一変してくれるだろうという目論見は失敗だった。函館を出たのは8月。10月になっても沈鬱なままでいた。そして極端に人嫌いになっていた。

私に自殺願望があったかといえ半分以上は本気で、半分は嘘である。生きているのが虚しかった。いつ死んでもいいと思っていた。空気を吸っているだけに過ぎないという感覚がコールタールのようにへばりついていて、毎日がたまらないほど鬱陶しく、

一日がとてつもなく長く感じられていた。毎日聖書を読み、救いを信仰に求めたが神は沈黙したままだった。自称ではあれクリスチャンである。自殺は最大の罪だと骨身に刻んでいた。死にたいと望んではいたが、死んでやるうという意志は全くなかったのは確かだった。

眼前に大海原が広がっていた。青い、何とも深い青の海だった。指輪のサファイアの色を連想し、またかと苦笑する。たかが振られたくらいで、あいつの代わりならいくらでもいると強がってみたものの、あまりに日常のことなのでいちいち過敏に反応することもなくなっていた。なるようにしかならないし、事実なるようにしかならなかった。それより怠惰で無気力なこの現状の打破を願った。眼下は直角の崖だ。高さ50m、降りることができそうだった。そして降りてみたいという欲求が湧き上がった。自分から行動を起こし、挑戦しようとする気持ちは旅に出て初めてだった。子供の時分から思慮が浅く、後先考えずに行動するタイプで、その時も地が出たのだろう。5mほど降りて二進も三進もいかない状況になっていた。降りたのと同じように登ればいいだけだが、事はそう簡単にはいかない。下を見て恐怖のため足がすくみ、身体が硬直して思うように動かなかった。落ちれば死ぬのは確実で、岩にへばりつきながら何を考えていたのか、少しも記憶がない。死ぬのがただひたすら恐かった。頭が真っ白の状態、どうやって登ったのか全く覚

えがなかった。時間にして30分以上はあったように思う。荷物の置いた場所から10m離れた所に辿り着いていた。生還という言葉

を文字通りに感じ取っていた。ぬるぬるした気持ちの悪い汗がべとついていて、油汗とはこういうものかと、言葉では知っていたが、二度と味わいたくない体感だった。一組しかない下着を取替えてようやく人心地つき、仰向けに寝転がった。訳もなく、否、よくぞ助かったという安堵感から涙がぼろぼろ零れていた。微笑みながら泣いていた。しばらくそうしていると、「死にたい・死にたいと喚いているのは、どこのどいつだ！」悪魔のような囁きが聴こえてきた。この言葉はきつかった。臆病者だとは思っていた。いざ死にそうな場に直面すると単純に恐怖以外の感情しかなかったのだ。「俺は死ぬこともできないのか。この軟弱者めがっ！」一転、怯懦と屈辱で打ち震えていた。顔を両手で蔽い、うつ伏せになった。最初から死ねないのは知っていたはずなのに、どうして死にたいと願っていたのだろう？ いいようもない悲哀が込み上がってきて、声を押し殺して忍び泣いた。「俺は死ぬこともできないのか」と何度も繰り返し、やがて「ううう〜」と嗚咽が漏れるや否や、堰を切ったように「わぁぁ〜」と慟哭していた。涙が流れて止まなかった。泣いて、泣いて、また泣いた。すると、カタルシスというのだろうか、化学変化のような不思議な浄化作用が起こって、涙が心地いいもの

なっていた。「人間いつかは死ぬんだ。だったら死ぬまで生きてやる。」と、そこに一筋の光を見出していた。肉体的にも相当疲れていた。私は泣き疲れてそのまま眠りに入っていた。

目覚めたのは夕陽が沈んで間もない頃だった。一朵の雲が紅と黄金色に染まり、それが希望の光に見えた。若いということは不思議なもので、何かきっかけがあればすぐに変わる。私は明らかに一皮剥けていた。今日は贅沢しようと香住の街で日本酒一升と沢山の刺身を買って揃えて四阿に陣取った。夜の帳が下りて、星の美しい野宿だった。好んで野宿していた訳でなく、旅館や民宿に断られるとためらいもなく野宿した。シーズンオフのせいか断られることが多かった。一軒目が駄目なら、雨の日以外は二軒目を探すことはしなかった。宮津では一人旅のお客さんは自殺をされても困るからと、そこは泊めてくれたが、私にそういう雰囲気というか、そう思わせる何かがあったのだろう。半分は野宿だった。無人駅（通過列車がうるさくて一回きりだったが）や、田舎によくある屋根付きのバス停を利用した。病的な厭人症とってよく、買い物や食堂で必要最低限の会話をするすら苦痛でたまらなかった。宿泊を断られると、いろいろ詮索されることがなくてかえってホッとすることさえあった。

酒と刺身が旨かった。野宿した時いつもはコップを二つ用意して、「なあ、紀子。」と、居もしない彼女に向かって語りかけるの

が夜の日課だった。哲学の話題が多かった。デカルトの二元論、カントの物自体、キルケゴールの単独者としての実存等々、哲学のことを理解していないのは承知で得々と語った。惨めだった。滑稽だった。だが、長過ぎる退屈な夜を過ごす術は、私にはこれしかなかった。悲し過ぎる一人芝居だった。真っ暗闇の虚空に私だけの声が響き、彼女は応えることなく、酔い潰れて眠るまで飲んでいた。

「もうそれは卒業だ。明日からは旅を楽しもう。ユースホステルにでも泊まって人とも話そう。くよくよしていても始まらない。死ぬまで生きる！ これしかないんだ。」一つしかないコップに別の世界が開ける予感がした。風邪一つひかない頑健な肉体を疎ましく感じていたが、これから寒くなるから野宿はやめようと身体を気遣うようなことも思っていた。大山に登りたいと初めて具体的な場所の意思表示ができた。いや、その前に鳥取砂丘だと、旅の行く先を浮き浮きした気持ちで想像していた。「金はあ
る。どうにかなる。」と、力強く宣言し、劇的心境の変化が起こった一日であった。

日本で人が住んでいる地では最南端という波照間島にやってきたのは12月だった。ハテルマという語感がいい。語感に魅かれてやってきたようなものである。旅行者は女子大生3人組と社会人に見える女と私の5人で、島に一軒きりの「みのり荘」という民宿に全員泊まった。私は先泊している

長髪の若者二人と相部屋になった。女が来たとはしゃぐ様子が浅ましく、口を利く気になれなかった。夕食後、オルグ(オルガナイザーの略)すると強制的に隣の部屋に連れていかれた。25才以下の若者ばかりで、宿泊者全員(12人)が集まっているようだった。仕切っているのは関西弁の男で、小柄で貧相だったが口は達者だった。眼鏡越しに蛇に似た陰気な眼差しが不気味で、ある種の威圧感があった。新左翼の黒ヘルに属し、犬(警官)をボコボコにした武勇伝を自慢げに語り、今はその件で警察に追われていると得意顔だった。聞いていて眉唾だと即断した。革命を成す為には...と、難解な左翼用語を駆使して滔々とアジっていたが、これには裏がある、俺は騙されないぞと身構えた。本題はみのり荘の親父のことだった。島で一番の金持ちだという。我々から不当に搾取しているとも言った。民宿の親父は気難しい顔で口騒さかった。夕食の内容をみてもボツタクリだと私も認めざるを得なかった。だからといって制裁(彼は断固制裁すべきだとアジっていた)に加担する気はなかった。こいつらは革命ごっこをしていると思った。女たちは押し黙っていたが男たちは付和雷同型の連中ばかりで、そうだ・そうだと、しきりに合いの手をいれていた。どうやっつけるか具体的な話しに及ぼうとした時、私は黙って部屋を出た。すると体格のいい男が部屋の中まで追いかけてきた。当時としては私も長身の方だったが、私よりも背が高く、100kgを越す大

男だった。アジ男に洗脳され心酔仕切っている風で、絶えずアジ男の横にいて、用心棒的な睨みを効かす役目を果たしていた。「そういう反動的な態度は許せない。」と、詰った。「非協力的な者は既に反動的だ。」とも言った。やたらに反動的を使う男で、頭の弱さを証明していた。腕力に自信がある態度で、それを行使する気配であった。私は格闘技をやっていたので、一瞥しただけで勝てると踏んでいた。この手の男は体格だけで、存外気が弱い。隙だらけで喧嘩慣れもしていないようだ。「反動的分子は痛い目に遭うぞ。」と、威嚇してきたが、「騒せえ。ガキの遊びに付き合うほど俺は暇じゃねえ。とっとと出て行け！」来るなら来いという気構えで一喝した。怯んで目を逸らしたのは奴の方だった。「(親父に)密告したらタダじゃおかねえからな。」と、捨てゼリフを残して出て行った。しばらくして同室の二人が戻ってきた。全員一致ではないので計画は中止だと告げた彼等には、安堵感が漂っていた。その夜、万が一に備えて眠らなかった。明日からは野宿だと決めた。

船は週に二便で、二晩の野宿は覚悟していた。たっぶりの昼寝の後、島を散策したが適当な場所は見つからなかった。南の島、冬という感覚はないが、日が暮れるのはやはり早かった。泡盛と食料はある。ここでもいいや、と海辺でぼんやりしていた。海から上がってくる男がウェットスーツに肩には足びれ、手に極彩色の魚を2匹持っ

て近づいてきた。どちらからともなく会釈して「君はみのり荘に泊まっているのか？」と人懐こそうに話しかけて隣に座った。「煙草はあるかい？」「ハイライトでいいなら。」「それは有難い。」そんな会話で始まった。私はみのり荘での顛末を話した。「連中がきて10日かなあ。空気が悪くなって。たいがい金が無くなったのさ。じゃあ、僕の所へ来ればいい。次の船までなら構わない。ただし、僕は君に干渉しない。君も同じにする。条件はそれだけだ。」思いがけない親切心に感謝感激だった。中肉中背、日焼けした面立ちは精悍で、鼻ひげをたたえていた。少しウェーブのかかった髪は肩近くまであって、顎ひげがあれば聖画に描かれているキリストに似ていると思った。

空き家になった民家を借りているという彼の家は居心地良かった。次の船までのはずが、もう一便後に延ばしてもらった。宿代として5,000円を差し出したが、酒を好きな分飲ませてくれればいいと、受取らなかった。沖縄が返還になって3年目。まだ酒税免除期間中で内地に比べれば驚くほど安かった。島に一軒だけある雑貨屋はすぐに日本酒が品切れになって(私たちが飲んでしまった)、泡盛ばかり飲んでいて。酒の肴は彼が獲ってくる魚で、一度だけ伊勢エビを口にしたら。初めて食べる伊勢エビの刺身は至高の味であった。野菜は毎日サツマイモの蔓のお浸しだった。毎日とはいわないが、朝起きては飲み、昼寝しては飲み、夜にまた飲んだ。私ほどではないが彼もよ

ほどの酒好きだった。墮落したと反省しないでもないが、天国とはこういうものかもしれないと思った。

二人はお互いのことを詮索しなかった。南の孤島で収入もなく暮らすからにはよほどの事情があるはずだった。私とて失恋の深傷さえ負わなければ地の果てまで来るはずもなかった。出身地と名前、それと年令、知ったのはそれぐらいである。横浜の人で前田といった。30才前後と読んでいたが25才だった。老けて見えるのは苦勞したからだろうと同情した。私も老けて見えるらしく、20才だといったら「僕より年上かと思っていたのに。20才にしては君の飲みっぷりは凄い。いくら飲んでも乱れない。君は酒が強い。」いたく感心した風だった。私たちは相性が良かったのかもしれない。トラブルはなかった。昼は別行動で、夜は必ず一緒に飲んでいて。口数は多くなかったが、何ともいい雰囲気だった。彼はクラシックギターが上手かった。演奏を聴いた瞬間、私は仰天した。和音の響き、ヴィルトオーズとっていい技巧、激しい旋律、雷に打たれたような衝撃が走った。琴線を激しく揺さぶって止まなかった。ある意味、呆然となった。聴いたことのない長い曲だった。私が率直に感動を表に出すと、私の様子を見て彼は満足気に演奏を終えた。「僕はこの頃バツ八に凝ってるんだ。」「プロみたいだ。」「まさか。君にはわからないかもしれないけど、何ヶ所も間違ってる弾いているんだ。」その言葉の裏には何かの理

由でプロのギターリストになれなかったという驚りかげのようなものも感じ取れた。「凄い。凄すぎる。俺、前田さんのこと尊敬してしまうわぁ〜」と、心の底から脱帽していた。毎晩、ギターの演奏をねだった。素直に感動する私に、彼は快く弾いてくれた。酒の酔いと相まって夢見心地の毎日だった。

一度だけ行動を供にしたことあった。夜10時頃、小高い丘に登った。丘といっても30mあるかどうかで、いい加減酔っ払った千鳥足でも苦にならなかった。平坦なサトウキビ畑の島でこの場所が島で一番高いらしい。満天の星だった。酔っていたので熱心とはいかなかったが南十字星を探してみた。水平線の辺りにそれらしいものを見たが、あるいは見たつもりになっていたのかもしれない。とにかく素晴らしい星夜だった。オリオンが天頂近くまで上り、天の川が音を立てて流れているようだった。手を伸ばせば届くほどの近くにあって、赤や青の様々な星の光のシンフォニーに包まれているようだった。彼は多分サーヴィスのつもりだったのだろう。私でも知っている有名な曲を爪弾いてくれた。「禁じられた遊び」「エリーゼのために」「アルハンブラ宮殿の想い出」次々と奏でていた。私はシューベルトのセレナーデを所望した。「僕、それはあまり自信ない。」と言いながらも弾いていた。美しい星月夜。美しいメロデー。もし倅せという形が具体的にあるとしたら、今この瞬間がそうなのだ陶酔然とした心持ちで確信していた。

周囲 15km 程の小さな島を私はほとんど散策していない。サトウキビ畑で右の角を欠いた水牛に出くわしてびっくりしたぐらいなものである。見るべきものがなかったというより、自堕落な生活を満喫していた。海には時間の多少はあったが毎日出向いた。八重山でも冬という季節はあるらしく、炬燵はあった。私には夏同然で泳ぐのに全く不都合はなかった。海の中は竜宮城である。極彩色の熱帯魚が乱舞し、珊瑚の形や色も様々で飽きることがなかった。エメラルドグリーン的大海、白い砂、それだけでも南国の気分は十分味わえるのだが、海の中の風景は格別で、目を見張るものがあった。泡盛と水は必需品で、飲んででは潜り、そして昼寝する。昼の大方は浜辺で過ごしていた。

島を去る前日だった。たっぷりの昼寝の後、泡盛を一口啣あぶって海に入った。この時は潜る気はなく、泳ぐのが目的だった。沖へ50mは進んだ頃だった。強烈な潮の流れに巻き込まれていた。何だこれは？と思い、大変な事態になったと思った。反転して岸を目指したがぐんぐん横に流されるばかりで、岸は遠のく一方だった。私は泳ぎが得意なつもりだった。しかし私の泳ぎでは潮流に太刀打ちできなかった。潮の流れの行く先に岬さかというか、陸の突端があった。そこを過ぎてしまえば完全にアウトだと思い、潮の流れに乗りながら斜め前方へ泳いでいた。後知恵だが意外と冷静だった。全身全霊を傾けて必死に泳いだ。無我夢中、火事場の馬鹿力... 能力以上のものが発揮され

て、潮の流れから脱出していた。小さな珊瑚礁に辿り着いた時にはもうヘトヘトだった。一步も動けなかった。30分以上休んでいた。生温い生活をしてきたから罰が当たったと思った。厳しいのがいい、北海道へ行こうと決めた。500m以上は流されていた。ひょっとして死んでいたかもしれないと呟いたが、喉元過ぎれば熱さを忘れるタイプの典型で、陸地を遠回りしながら、何事もなかったように平然とした足取りで戻っていた。

「伊勢エビをご馳走したかったが獲れなかった。これで勘弁してくれ。」大きなハリセンボンだった。島では中風の薬だという。フグの仲間だから不味いはずはなкаろうと、味噌煮にしたものは十分過ぎるほど美味だった。フグなどという高級魚は口にすることもなかったが、こりとした硬い淡白な肉質のそれは、本で知ったフグのものと同じように思えた。ただ喰える部分が少なかった。30 cm以上はあるハリセンボンだったが、あつという間に平らげてしまっていた。あとはサツマイモの蔓のお浸しと鯨の缶詰で泡盛をしこたま飲んだ。彼は吐いた。私も吐いた。そしてまた飲んだ。いつになく彼は饒舌だった。都会暮らしは嫌だが来年の3月には帰るといふ。いつまでもこんな生活をしてはいけない。社会復帰しなければ、と愚痴めいた言葉を何度も何度も繰り返していた。やがてパタッと倒れるとそのまま寝入っていた。社会復帰という言葉がなぜか気になって仕方なかった。今はその

気はないがいつか重くのしかかってくる言葉だろうと予感めいたものを覚えていた。だが... しかし... そして... どこでどうあったとしても... 俺は酒さえあれば生きてゆける。と、朦朧とした意識のうちに眠っていた。

朝遅く起きた時、彼は不在だった。二日酔いで頭がガンガン焼けるように痛かった。昨夜のうちに感謝の気持ちと別れの言葉を執拗に述べたし、居ない方が気が楽だともいえた。しかし薄情な奴だとも思った。出航の時間が間近だった。「北海道に行きます。ありがとうございます。」と殴り書きと一万円を置いて出た。船が島を離れた。彼は見送りに来てくれなかった。酔生夢死の島だった。船着き場が遠くなった。「田沢～！」と叫ぶ声が聞こえたような気がした。船着き場に米粒より小さい人影が見えたような気がした。彼であって欲しいと願った。彼だと思って手がちぎれるほど振りながら「前田さ～ん！」と、何度も何度も叫んでいた。

舞阪(静岡県と愛知県の県境 現 浜松市)。25 才になっていた。9 月、残暑の厳しい日で海水浴に来ていた。海水浴の人は、私の感覚で多いと思う程度にいた。20 才の頃ほどではないが、相変わらず人嫌いだった。人のいない場所を求めて川を渡った(正直この記憶ははっきりしていない。多分渡ったはずである)。おそらく遊泳禁止区域だったのだろう。人はいなかった。波静かに

単調な砂利浜が続いていた。

私は泳ぎに自信があった。1 Km は楽にこなせた。そこに過信が生じていた。快調に沖へ泳ぎ始めていた。自分の力量以上に速かったのに気付かなかった。300mほどしてから反転して陸を目指した。余裕こいていたのだがなかなか前に進まない。平泳ぎだと後退した。まさか引き潮か？と焦りから狼狽に変わったのはしばらくたってからである。全力でクロール、足をばたつかせ腕をフル回転、5分はそうした。いくらも進んでいない。再び全力で... 無理だと悟った。私は万事諦めが早い。全身から力を抜き、仰向けに漂流するに任せた。助かる見込みは少ないと思ったが、絶望していたのでもなかった。こうして漂流していれば半日は持つ。その間に漁船などに救助されるかもしれない。その位の計算をし、それだけがかすかな望みだった。陸が遠くなってゆくの肌身にしみてわかった。後悔しても始まらないが出るのはやはり後悔の愚痴ばかりだった。時間が経つにつれ心細くなった。今度ばかりは悪運も尽きたと覚悟した。この世に生まれて、何事もなせずに死ぬのかと思えば口惜しかった。『おまえは船乗りもやったし、放浪もした。やりたいことはやった。それで十分じゃないか。いや、俺にはやりたいことがある。やり残した事もある。このままゴミ屑みたいに死ぬのは嫌だ。やりたい事とは何だ？ わからない... しかし...』そんな類のことを延々と自問自答していた。

空腹を覚えた。この非常時に、危急存亡の時に、空腹という生理的欲求を訴える我が肉体を疎ましく思った。ツブ(タニシを豆腐と味噌で和えたもの。よほどの貧乏人でも口にしない食材だが大好物だった)を喰いたいと思った。おふくろの味だった。すると「いかにい~ます父母 つつがなしや兄弟 夢はいまも巡りて 忘れがたき古里」と、唱っていた。歌詞は定かではないが、哀愁じみた旋律だけはしっかりと覚えていた。脳裡を締めつけるような悲しみが走り、いやでも見つめなければならなかった太陽が滲んだかと思うと、涙が絶え間なく溢れ出ていた。両親のことを思った。そして我が身の親不孝を呪った。久しく両親のことなど思い浮かべることはなかったのに。まして母親は... 私は母が嫌いだっただ。口騒さく愚痴を吐く能力しかない女だと思っていた。なぜか脳裡を駆け巡るのは七割方が母だった。最初に浮かんだのはお山参詣の行列に参加して踊っている姿だった。そこだけ後光が射しているような、幼な心にも母は眩しく美しく見えた。実際若い時の母は美人だった。麻疹で高熱を発した時、みかんの缶詰を食べさせてくれたり、そんな他愛もない出来事が走馬灯のように次々と浮かんで消えていった。野放図で糸の切れた凧のような性格の私に、口喧しく接したのは全て親心だと今更ながらに悟った。勿論、好きな父のことも思い出していた。そして死んだ祖母や、さして仲がいいともいえない第二人のことも。しかし捨てられ

たといえ別れた恋人や竹馬の友、柔道部の連中、誰一人として思い浮かんでこなかった。全部肉親のことばかりで、それも小学生時代を中心に幼少のものばかりだった。死んでも誰一人悲しんでくれる人はいないと思っていた。だがこの期に及んで家族だけは悲しんでくれそうな気がした。それこそが言葉で説明できない絆という重い何かだと思った。「戻りてえ～、家さ戻りてえ～」突如悲痛な呻き声で口走っていた。泣き濡れながら親孝行したいと渴望した。身から出た錆とはいえ、このまま死んでゆくのはいかにも理不尽だった。せめて死ぬ前におぶくろの作ったツブを食べたいと願った。「何をやっても無意味だと虚無的に生きてきたのはおまえ自身じゃないか。今更ツブを喰いたいと感傷的になってどうする。この痴れ者が。」と、悪魔の囁きがした。「うるせえ、ツブを馬鹿にすんな。ツブを喰いたいと思うことだって、立派だとは言わないが、生きるに値することなんだ。俺は生きたいんだ。」と、反駁した。生きねばならないと思った。それには一にも二にも気力、泣いている場合ではなかった。陽が沈むまでが勝負で、船に発見されることを信じて祈るしかなかった。

どのくらい漂流していただろう。ふと、^{おか}陸の方を見ると近づいているような気がした。いや、錯覚や願望でなく、確かに近くなっていた。上げ潮になったのだろうか。そんな理由の如何は^{いかん}どうでもよく、直感的にこれはゆけると踏んだ。1 Km 以上はあり

そうだった。何 Km であろうとゆけるという感覚を^{たの}恃みにするしかなかった。諦めの早いのがこの場合いい方に働いた。体力が温存されていたのだ。肉体の隅々まで気力が充実していくのがわかった。そして生死を賭けて泳ぎ始めた。焦りは禁物だと言い聞かせた。登山するように一步一步着実に前に進むことだけを考えた。クロール、横泳ぎ、平泳ぎを交互に使い分けながら、極力体力を消耗しないようにゆっくり泳いだ。疲れると立ち泳ぎして陸を確かめ、もっと疲れると仰向けに漂流することも厭わなかった。それを何回か繰り返した。伸るか反るかの状況下に比較的冷静だった。岸まで 100m までに迫った。体力的には限界を越えていた。遠浅なら足がつくかもしれないと身体を沈めてみたが無駄だった。浮上して泳ぎ出したが身体が重く、手足の動きがバラバラで思うように前進できなかった。足を水面でバタつかせる体力もなくなっていた。ここまで来れたんだ、ガンバレ、もう少しだ、ガンバレと叱咤激励した。岸が限りなく遠くに思えた。焦っていた。70m ほどになった。足が着くことを期待して身を沈めた。両手を伸ばしても足は砂地に着かなかった。期待していただけに失望もありありで、浮上する際、何かの拍子で海水を誤って飲み、激しく咳き込んでいた。一瞬だが小学3年の時、川で溺れたことが頭を^{かす}掠めた。その時は川の流れて浅い場所に着き難を逃れたが、この時は人はこうして溺れるという、恐怖を骨身の底から感じた。必死

で... 一生懸命に... 無我夢中で、どんな言葉で形容してもきれいな気持ちで私は泳いだ。死力を尽くした。そして力尽きた。「もうアカン。」と、大阪弁を吐いた時、全身から力が抜けていった。と、幸運なことに頭一つ水面に出て、足が砂地に届いていた。岸まで50mはあった。助かったとは思わなかった。無我夢中で水中を歩き歩いた。水面が膝くらいになった時倒れた。立ち上がり、再び倒れた。それから四つん這いになって、ようやく、ようやく岸辺に達した。

腰から下はまだ水中だった。心身とも疲労困憊の極みで、身動き一つ出来ず、腹這いのままじっとしていた。まだ助かったという実感は湧いてこなかった。猛烈な喉の渇きが襲っていた。喉の渇きだけで死にそうだった。それが生きている証明だと喜びながら、体力の回復を待った。脱衣した場所から1Kmくらい愛知県寄りだった。

その夜、浜松の鰻屋にいた。立派な店構えで、個室に通され特上の鰻重を頼んだ。値段の割にはさして美味だとも思わなかった。ビールなんぞは酒の内に入らないと飲んでいて、酔いの回りが意外に早かった。「樽の住人にはなれなかった」と、呟いた。物質的な豊かさや権力を追求しても真の幸福には至れないというディオゲネスはある意味、私の理想だった。犬儒的な生き方に徹底し切れなかった。隠れて生きよとエピクロスは言った。隠れて生きてきたがエピクロスの園はなかった。死を恐れることは

ないというアタラクシアの境地を求めても高嶺の花だった。そういう風にして私は哲学者たちの群像を頭に浮かべていた。「あれかこれか」キルケゴールまで来た。キルケゴールのその人と為りと思想は私に最も影響を及ぼした。単独者として主体的に生きる。それが真理に至る真摯な人生の有り様だと信じていた。宗教的実存はおろか、倫理的実存にも程遠かった。蟹は自分に合った穴を掘る例えのように美的実存の段階にとどまり、そこが最終段階でもあった。キルケゴールの思想や哲学を理解しているとは少しも思っていなかった。著書「反復」「死に至る病」「不安の概念」「あれかこれか」の4冊を読んだだけである。それも字面だけを。ただ無条件に北欧の詩人哲学者をこよなく愛していた。もう別れ時かもしれなかった。あれかこれかという二者択一の生き方はやめよう。あれもこれもでいい。自己疎外されるまま大衆の中に埋没してもいい。美的実存でいいと弁解していた。私は^{しゅうたん}愁嘆しているのでも愚痴をこぼしているのでもなかった。放浪をやめて故郷へ帰ろうと決意していた。その決意を後押しするための通過儀式としての自問自答だった。行動が破茶滅茶な割には何事につけ私は、屁理屈を含めて理屈屋である。合理、非合理を問わず得心する理屈が欲しかった。正・反・合、そして^{アウトヘーブン}止揚、こんな言葉の遊びはやめよう。観念論者であることを潔しとしてきたが、これからは現実論者になろう。そう心思して哲学との決別をきめた。

哲学は我が青春の柱の一つだった。ことさら心痛を覚えるほどでもなかったが一抹の淋しさは否めなかった。

ふいに飼っていた犬の姿が浮かんだ。クロという名で、中学の時貰った。よく私に懐いた。生きていれば10才だった。クロも立派な家族の一員で、漂流していた時なげ思い出さなかったのだろうと、後ろめたい感情が生じていた。同時に、誰一人許す人がいなくてもクロだけは許してくれそうな気がした。許すも許さないも、悪いことをしたという気はさらさらないが、放浪という世間から逸脱した生活をしているという後ろめたさはあった。反社会的でないにしろ社会から逃避していた。聖書の放蕩息子の例のように両親は許してくれるだろうが、クロなら無条件に私の存在を受け入れてくれると確信していた。文字で表現するなら許しではなく、宥しという宗教的感情に根ざしたものだ。岩木山を背景にクロと散歩する姿が見えた。仮に帰ったとして、親孝行はできなくても、クロ孝行はできそうだった。クロにかこつけて、これも故郷に戻るための確認作業かと、さすが理屈屋の性だと、そこまでするか、思わず苦笑を漏らしたが...

「俺は十分に悲しんだ。俺は十分に苦しんだ。」迸る真情の吐露は「もう帰ってもいい。なあ、クロならわかってくれるよなあ。」と喚いていた。自分の声にびっくりして、少し酔い過ぎたかと反省した。

「俺の青春は何だったのだろう？ 無為

か？ 徒勞か？ 頭が狂っていたとしかいいようがない。青春とは脳がいかれた状態を指すのだ。本当に脳がいかれていたんだ。青春とは頭が狂っている時期なんだ。真っ当な生活をしよう。社会復帰しよう。」
ひとり言をしていた。ひとり言は孤独を耐え忍ぶ唯一最大の身にしみついた習慣だった。こうして故郷へ帰るための作業手続きは完了した。私の青春は終わった。何をすべきかわからないままに長くて暗い蹉跎ばかりの青春だった。

帰郷したのは山が錦秋に染まるちょうど今頃、32年前だった。滑落した後で三度の死に損なった場面を思い出していた。文章にすれば長くなりすぎるが、脳裏を駆け巡った時間は30分も越えてはいない。生き長らえたのは運が良かったのである。舞阪で溺れかけたのは引き潮ではなく、湾岸流に巻き込まれたに違いない。湾岸流なら真横に20mも泳げば簡単に抜け出せたと、今なら言えるが、当時は無知だったし、湾岸流という言葉もなかったし、そういう現象も知られていなかったような気がする。助かったという事実があればそれで事足りる。助かったとはいえ、いたずらに馬齢を重ねただけだが、しかし今はこの世に必要なものはないと考えるようになったので、私のようなものでも生きている意味はあると思っている。

親孝行するつもりで帰郷したが、事實はそうならない。飲んだくれてはバクチ(賭け

マージャン)ばかりの荒れた生活で、親不孝を重ねていた。弟たちはとっくに所帯を持っていたが跡取り息子にはそういう気配はなかった。両親の口癖は、「結婚しろ。」の一点張りだったが、なかなか縁がなく、完全に諦めていた。そんな私を拾ってくれたのが妻だった。三人の子に恵まれ、内孫を見せてやれたのが唯一最大の親孝行だった。私が苦勞をかけすぎたせいか、父も母も早死にした。今年母の十三回忌を済ませた。「親孝行したい時に親はなし」私にとって、まさしく文字通りだった。クロ孝行は果たした。独身の時だが、車に乗せて三陸や秋田に出かけて寝泊りしたこともあった。犬にしてはすこぶる長命(22才で夭寿を全うした)で、私が結婚したのは34才の時だから、妻の顔を見せることもできた。

下の子が20才になるまであと三年。そこまで生きれば親の役目は済む。そう思って生きてきた。この齢になってわかるのだが、私が親にかけた心配や苦勞は半端ではなかった。放浪時代、警察に搜索願を出したそう、その心情を思えば泣けてくる。幸い息子は私に似ず、学校の成績以外は全てにおいて私より優れて育てくれた。私の親に比べると、私の子育ては天国だった。家族に愛されているかといえば、はなはだ疑問だが、少なくとも嫌われていないのは確かだ。それだけで十二分に幸せなことである。他人と比べることをせず、「知足」...足るを知っていれば人生の成功者といえよう。危うく死に掛けたが、仮に死んでいたとし

ても、他人の目にどう写ろうと、^{わたくしでき}私的には人生の成功者だと思っていた。息子には死んだら遺灰を小泊北灯台からまいてくれと遺言している。娘には葬式の時、シューベルトのピアノソナタ 21 番をBGMに流してくれと頼んである。そうなるとは限らないが、たぶんそうなるであろうと、なぜか安心している自分がある。しかし、あと三年は生きたい、息子が20才になるまでは。それ以降は？あとは野となれ山となれだ。余生はまた放浪でもするかと、ちらっと頭に浮かんだ。いや、離婚されていなかったら女房孝行が一番先だと、思い直す。生活能力に欠ける私を何年も養ってくれたのだからと。「真実一路」(高校の時読んだ山本有三の小説を突然思い出していた)とは口が裂けても言えないし、言う気もないが、「真実一路の旅なれば真実鈴ふり思い出す」(小説の冒頭に出てくる短歌)と、四国八十八ヶ所を妻と二人でお遍路の旅に出ようか。少し恥ずかし気^{おもはゆ}に面映い気持ちで微笑していた。

2009(H21).12.30 入稿